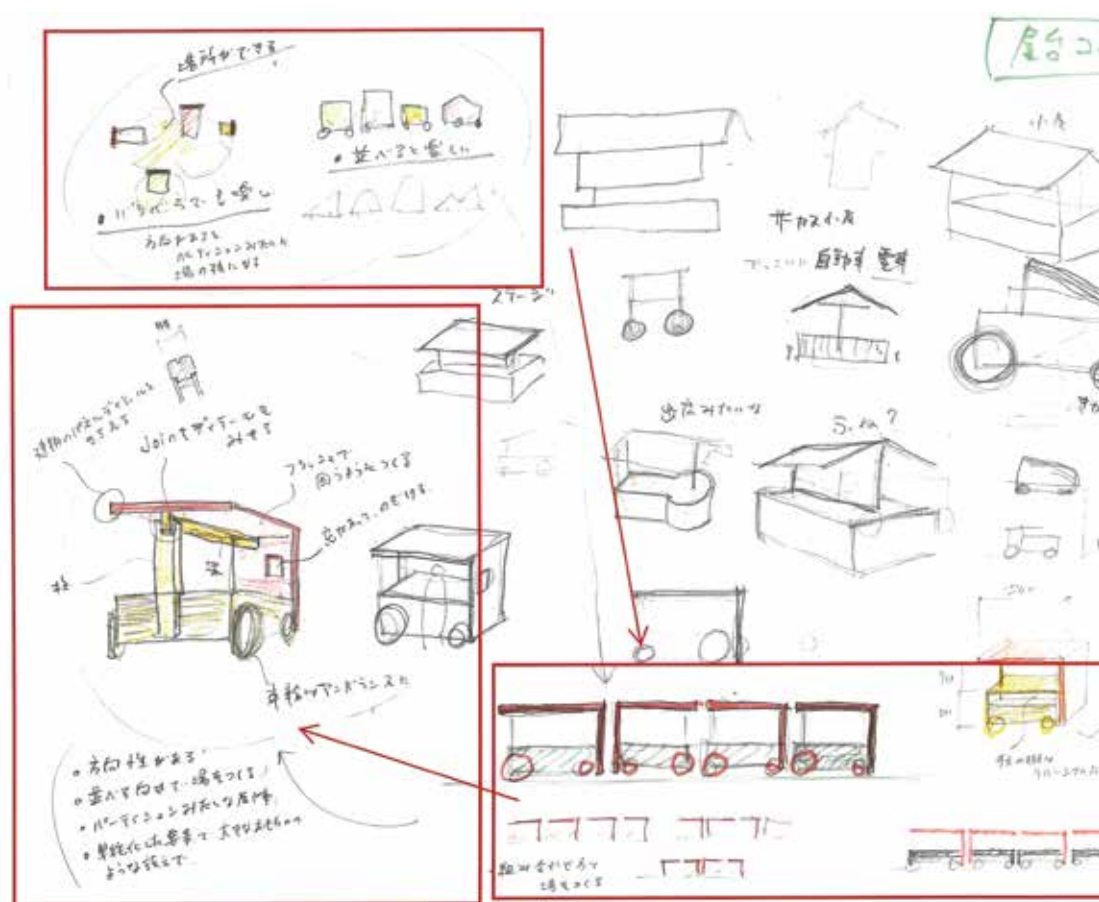


ARCHITECT

THE JAPAN INSTITUTE OF ARCHITECTS

2022 **2** FEB



CONTENTS

- 連載：防火建築帯・防災建築街区を巡って ④ ————— 土屋 和男
第37回JIA 東海支部設計競技 2次審査結果 ————— 間瀬 高歩
活動報告：内藤廣 講演会「これからの地域の建築家の役割」～5つの質問に答える～ ——— 大瀧 正也
第53回中部建築賞の入賞・入選・特別賞作品決定

CONTENTS

地域会だより	1
連載：防火建築帯・防災建築街区を巡って 6 土屋 和男	2
第37回JIA 東海支部設計競技 2次審査結果	
血のつながらない家族の家	4
・結果と審査員紹介	4
・審査経過 間瀬 高歩	4
・審査総評 武藤 隆	5
・金賞「三年限定「家族」一家の解体と家族の再定義」 中川 エリカ	6
・金賞受賞者の声 井川美星/力安一樹	7
・銀賞「伽藍堂のイエ」 武藤 隆	8
・銀賞「0.02mmの接線」 橋本 雅好	8
・銅賞「「間」係性一間から生まれるつながり」 道家 洋	9
・銅賞「家事族 家事を共にして生きる家族のかたち」 道家 洋	9
・銅賞「明るいトンネルの先に」 東福 大輔	10
・銅賞「たまには逃げてもいいんだよ」 能勢 陽子	10
・中川エリカ ゲスト審査員特別賞「道を内包する家」 中川 エリカ	11
・奨励賞「線のない渦 ～個性から始まる「家族」と「街」～」	11
・審査を終えて 中川 エリカ	12
・中川エリカ氏 記念講演会 水谷 夏樹	12
静岡発 内藤廣 講演会 「これからの地域の建築家の役割」～5つの質問に答える～ 大瀧 正也	13
三重発 丹生大師周辺を建築ウォッチング 伊藤 達也	14
2022年度 役員選挙報告 東海支部・愛知地域会	15
保存情報 第242回 登録有形文化財：臨濟宗妙心寺派 覚王寺 原 眞佐実	16
編集後記 中村 慎吾・川本 直義	16
第53回 中部建築賞の入賞・入選・特別賞作品決定	17

地域会だより 今後の予定

- JIA静岡地域会
 - ・ 2/10 静岡地域会役員会の開催 (WEB同時開催)
- JIA愛知地域会
 - ・ 2/7 建築八団体連絡会議
- JIA三重地域会
 - ・ 2/18 三重県総合文化センター ※ZOOM併用
 - ・ 第7回役員会
 - ・ 第6回例会、会員研修会 (環境セミナー)

表紙 モノのカタチが空間に与える影響

このラフスケッチは木育施設の「ワゴン」として、おもちゃ遊びの台になったりあるいは紙芝居のステージになったりといった機能が求められた家具の初期のスタディである。スケッチでごにやごにやと探る中で、方向性のある衝立のような存在にしようというところまで手練り寄せた時点でほぼカタチが決まった。私の場合は、そのモノのカタチが空間にどんな影響(体験)を与えるかという点が、設計方針を決定する重要なテーマになっているように思う。



山田 尚紀 (JIA岐阜)
(株)デザインボックス

防火建築帯・ 防災建築街区を巡って 6



共同ビルの活用と将来

耐火建築物の普及と地域性

防火建築帯・防災建築街区は、防火・防災という公共的利益を目的として、私有財産に公的資金を投入するしくみであった。商店主たちによる共同ビルの建設は、関東大震災後の復興や植民地での先例があったものの、多くの地方都市では初めての試みであり、事業主たちにとっては大きな投資であったろう。昭和戦後の一時期、成長を目指す息吹が想われる。

これはまた、地方都市にRC造、鉄骨造の耐火建築物を広めた制度であった。最初の頃、設計はこの制度を熟知する組織事務所と、地元の設計事務所との共同で行われたようだ。例えば静岡呉服町防火建築帯の設計は、市浦健、野生司義章という都市不燃化を進めた建築家を指導者として、地元の針谷正作、磯部幸一、福島賢治が携わった。これらの建設を通して、耐火構造、都市計画等のノウハウが伝授されていったと思われる。

法律に基づく建設であるから全国一律の制度だが、当然ながら建設地の地形、既成市街地との関係、商店街の資金等からいろいろな結果が生じた。例えば、熱海(1961-71(昭和36-46)年)では急な坂道とカーブに沿って独特な景観になった。犬

山(1965-68(昭和40-43)年)では既存の城下町の通りの延長上にRC造の建物が並び、明確な対比が生まれた。

また第5回で紹介した藤沢のように、防災建築街区は街区単位での再開発を目指していたが、そのとおりになった所は多くない。富士市吉原本町(1961-73(昭和36-48)年)では、旧東海道沿いの防火建築帯に続いて、防災建築街区が約400mにわたって形成された。これらは構想段階では、ブロックごとにRC造の共同ビルが計画されていたが、結果的には沿道のみとなった。構想では各棟間に中庭を設け、街区を跨いだ中庭どうしの通り抜けが示されていた。沿道型の共同ビルでは、サービス動線の確保や上階へのアクセスが問題となることが多く、中庭型の構想はこれらの問題を解決する示唆を含んでいた。

更新と活用の視点

さて、この連載も最終回となった。やはり防火建築帯・防災建築街区の先行きについて、触れなくてはならないだろう。多くの地方都市では中心市街地の衰退が言われて久しく、その中核に老朽化した共同ビルがある。地方都市を持続可能とするために、これらの共同ビルをどうするか、という

問題意識に、この研究は立脚している。

共同ビルの更新は市街地再開発事業によるが、その再開発による事業モデルの限界が見えている。再開発では保留床を操るデベロッパーが参画するが、成長型の経済を前提とした計画は、今後の地方都市においては持続不可能と見込まれる。むしろ都市再開発法以前の、地権者たちによる純粋な共同事業に打開のヒントがないだろうか。

都市計画的な街区の更新には長期にわたる合意形成と計画が必要であり、その検討と調整の期間に手をこまねいていれば、中短期的な経済的活力を失ってしまうことになりかねない。長期的な検討を進めつつも、中短期的に既存の建物を活用していく。活用を模索する中で、価値を見直し、長期的な計画に反映されることが望まれる。

リノベーションで回す

近年、古い共同ビルの一角でリノベーションが行われている。浜松の田町や、富士市の吉原本町の例が目される。部分的なリノベーションは、共同ビルの機能更新としては根本的な方法ではないかもしれないが、再開発を期待してはいつになるか知れない。それよりは少ない投資



熱海 咲見町防災建築街区
急な坂道に沿って17もの街区が指定された



犬山 下本町防災建築街区
城下町の街並みの先に共同ビルが続く



富士 吉原本町防災建築街区
旧東海道沿いの両側に壁面線の揃ったビル

で、小さな変化を多発的に継続させることで、少しずつ繕っていくという方法があるのではないかと考えたオーナーたちがいる。街を生き長らえさせる実践である。再開発が、いわば帽子から靴まで全部買い換える方法だとすれば、リノベーションは既にある服との調和を考えながら、古くなった服を直したり、使えなくなった服だけを買い換えるのに近い。後者の方が、一般の日常生活に即していることは明らかであろう。

リノベーションのためには、防水、設備、動線等の更新を容易にする手法の検討、接道、採光等の法的な制約条件の緩和等が求められる。例えば1階の店舗内を抜けて上階のゲストハウスに行くような、ビルごとにテーマをもった活用法もありえる。ストック活用の評価が高まれば、再開発を待つまでの代案ではなく、積極的なまちづくりの方法としてリノベーションを捉えることも可能であろう。

魅力あるテイスト

リノベーションを魅力あるものとするためには、何よりもまず、新築にはない特徴を見出さなければならない。土地区画が間口に現れた外観、奥行の深い室内、道路に沿った壁面線と高さ、店舗の入口と不可分な歩道、横長の窓の後ろにある多様なプラン等、再開発の建築ではなくてしまう防火建築帯・防災建築街区の共同ビルならではの姿を、積極的に評価する価値観が重要である(そのためにこの研究をしている)。また時間の経った物にしか現れない経年変化、古い仕上げや部材等を、新築にはない価値として活かし、楽しむ視点が必要である。



富士 吉原本町防災建築街区
両側で隅切りをして立面を揃えている



浜松 田町防災建築街区 カギヤビル
403architecture [dajiba]が複数のリノベーションを手がけたことで知られる



富士 吉原本町防災建築街区 本一ビル
近現代建造物の詳細調査対象となった。近隣では富士山まちづくり株式会社、勝亦・丸山建築事務所、伊達剛建築設計事務所などがリノベーションに取り組んでいる

他にはないテイストを引き出し、魅力を適切に演出できれば、感度の高いテナントを集めることも可能であろう。感度の高いテナントが魅力を感じるテイストとは何だろうか。それは、あいまいさ、ゆるさではないだろうか。きれいすぎない仕上げや自由度の認められる使用法、さらには使用後の原状復帰のハードルの低さ等が、オーナー側にもテナント側にもメリットとして働くような認識は、新築の物件では望めないことであろう。

使い続けるための文化財

文化庁は2016年度から近現代建造物緊急重点調査を実施中である(建築士会(事務局)、JIA、建築学会に委託し、2年間で2県ずつ)。東海地方では静岡県が実施済で、2018-19年度に戦後の建築を調べた。詳細調査の対象となった30件のうち、防火建築帯・防災建築街区の共同ビルが3件含まれている。呉服町、吉原本町、清水銀座である。沼津本通は既にDOCOMO-MO Japanによって選定されている。これらは将来の文化財候補となるものだが、従来の文化財とは評価の観点を少し変えなくてはならない。建築は物としての価値が基本だが、防火建築帯・防災建築街区がもたらした防災や歩行者空間は、建物の形姿以上に重要な都市機能であった。昭和の一時代に果たした共同ビルの公共的役割を、文化財としても評価する時機が来ているのではないかと。

一般に最もハードルの低い文化財は登録有形文化財だが、これには建築基準法が適用される。しかし第3条1項3号に基づ

く条例を制定して、登録有形文化財や景観重要建造物等への適用の除外や緩和を図っている自治体もある。簡単ではないが、街を使い続けるひとつの手段として文化財を視野に入れることもあり得るだろう。そして、これからの身の丈に合った街の姿として、防火建築帯・防災建築街区を捉え直すこともできるのではないだろうか。

主要参考文献:

土屋和男ほか「熱海における防災建築街区と市街地改造について」『日本建築学会関東支部研究報告集』2019

土屋和男ほか「富士市吉原における防火建築帯および防災建築街区の形成と構想について」『日本建築学会東海支部研究集会』2021

柳沢究ほか「中部地方における防災建築街区の実態把握と評価および現況の課題」『住総研研究論文・実践研究報告集』No.45, 2019

柳沢究ほか「防災建築街区の再生にみる都市空間更新の条件と可能性」『住総研研究論文・実践研究報告集』No.47, 2021

『遊休不動産活用・再生に向けた実態調査 報告書』富士商工会議所, 2016

『近現代建造物緊急重点調査 (建築) 報告書 静岡県編』日本建築士会連合会, 2020

◎連載の最終回にあたり、改めてこの研究の代表者、脇坂圭一先生(静岡理工科大学教授)、共同研究者、亀井暁子先生(静岡文化芸術大学教授)をはじめ、ご教示をいただき、お世話になった多くの皆様に感謝申し上げます。



土屋 和男
常葉大学造形学部造形学科 教授

血のつながらない家族の家

■日時：2021年11月20日(土) 12:30～16:00 ■会場：JIA東海支部事務局+ZOOMオンライン

○【金賞】	「三年限定「家族」一家の解体と家族の再定義」	井川美星、力安一樹 (早稲田大学大学院M1/フリー)
●【銀賞】	「伽藍堂のイエ」	小林奈央(京都府立大学大学院M1)
●【銀賞】	「0.02mmの接線」	三枝理子(九州大学大学院M2)
●【銅賞】	「「間」係性 一間から生まれるつながり」	中井由季(大同大学工学部4年)
●【銅賞】	「家事族 家事を共にして生きる家族のかたち」	村上琴美(横浜国立大学Y-GSA M2)
●【銅賞】	「明るいトンネルの先に」	大久保芽依、亀山友花、中村茉友果、三輪華菜子 (名古屋工業大学工学部3年・1年、名古屋造形大学地域社会圏領域2年)
●【銅賞】	「たまには逃げてもいいんだよ」	梶田龍生、安井友輝、田中千裕、高橋萌 (名古屋工業大学工学部3年・2年)
【中川エリカゲスト審査員特別賞】	「道を内包する家」	諸江一桜(秋田公立美術大学2年)
【奨励賞】	「線のない渦 ～個性から始まる「家族」と「街」～」	林那海(三重県立四日市工業高等学校3年)

■審査員(順不同・敬称略) ◎:審査員長 ○:ゲスト審査員



◎武藤 隆

大同大学/武藤隆建築研究所



◎中川 エリカ

中川エリカ建築設計事務所



道家 洋

道家洋建築設計事務所/JIA



東福 大輔

零三工作室/JIA



能勢 陽子

豊田市美術館学芸員



槇本雅好

椋山学園大学

■審査経過

2021年度の第37回設計競技2次公開審査・記念講演会は、11月20日 JIA東海支部事務局内に会場を設け、オンラインにて開催した。今回の設計競技のテーマは、武藤隆審査員長より『血のつながらない家族の家』として出題された。入賞者の作品の多くは、家と家族、血縁と他人との関係性や距離などについて深く掘り下げられ、多様な住宅が提案された。

2次公開審査の方法は、1次審査で選ばれた7作品の応募者が1組ごとに5分間のプレゼンテーション、審査員から10分間のヒアリングを行い、その後全体の公開審査・投票を1時間掛けて行った。公開審査では、作品1点1点について振り返りながら応募者と審査員とのディスカッションを行うこととしている。議論を重ねながら作品を講評していく公開性を持たせた審査方法は、設計競技における特徴のひとつである。

審査結果は、6名の審査員が5点満点で各作品の評価付けを行い、最多得点を獲得した『三年限定「家族」一家の解体と家族の再定義』が審

査員協議の上、金賞に決定した。そのほかの作品は銀賞2点、銅賞4点、中川エリカゲスト審査員特別賞1点、奨励賞1点、上記の方々の審査結果となった。

東海支部設計競技特別委員会では、2014年度の第31回以降、社会性が高く時事性のある問題からテーマ設定する方針とした。2020年初頭からは、新型コロナウイルス感染症の拡大に伴い、人々の暮らしは一変し、新たな生活様式を余儀なくされている。このような不安定な社会においても、本委員会では、今後も住まう空間の多様性や建築の可能性を共に考える場を意識しながら取り組んでいきたいと考えている。

問瀬 高歩 (JIA愛知)

地域計画建築研究所・設計競技特別委員会委員長



審査総評

JIA東海支部主催によるこのコンペは、特に近年骨太なテーマを設定し開催され続けている。昨年度はコロナ禍の中、開催が見送られたが、今年度は公開審査をリモートで行うなどの配慮をして、無事開催されたことをひとまずは喜ぶたい。

審査員長のお話をいただいた直後の、2021年3月17日、札幌地裁にて同性同士の法律婚を認めないのは憲法違反であるという判決が下された。同性婚や異性婚の問題だけでなく、選択的夫婦別姓制度の問題やLGBTQ+への理解など、世界はあらゆる価値観に対して多様性を認めていく方向にシフトしているにも関わらず、この国では、明治以降に確立された家制度や家督相続の考え方、戸籍制度を頑なに守ろうとする近年の保守的な政権下においては、画期的な判決だと思えた。

その一方で、2年前に開催されたあいちトリエンナーレ2019において、作家・田中功起の「抽象・家族」という作品のことも思い出していた。この作品は、登場人物の父母のどちらかが、海外にルーツを持つ(いわゆる「ハーフ」と呼ばれる人々)が、疑似家族のように共同生活をしながら、それぞれの経験や考えを語り合う映像を中心とした作品で、展示室全体がその映像を含めたインスタレーションとして展示されていた。

4人のそれぞれ出自のことなるひとたちの、家族や共同体との関わりを語るその映像の中で登場人物がこう語る部分がある。「…あの時の共同体は今でもわたしに力を与える…いつまでたっても家族だと思う」

異性間で結婚した夫婦も実は「血のつながらない家族」なのだが、疑似家族のように共同生活をするひとたちも「血のつながらない家族」なのだ、その作品を見た時にとりわけ印象深く思ったことを振り返っていた。

そんなこともあり、家族のありかたや関係性を再考させる「血のつながらない家族の家」というテーマによる応募者への問いかけを設定した時、さまざまな住まいのあり方をおのずと想像していた。

テーマ文にも例示した、異性間で結婚した夫婦そのものの関係性を問うもの、LGBTなどのカップルと血のつながらない養子による「血のつながらない家族」のありかたや、配偶者を亡くした同性の「おひとりさま」同士の生活はもちろんのこと、孤独死や相続の問題、それらに起因する空き家問題の発生とその解決へとつなげていくもの、血のつながらない他人同士が共有しながら住むシェアハウスと呼ばれるもの、里親制度への提案などだが、期待通り様々な案が集まった。

また、それらの提案の中には「血のつながらない家族」に対して、ポジティブな態度とネガティブな態度、そしてシニカルな態度が混在していたのも印象的だった。中でもシニカルなものには空間的な魅力があるものも多かったが、一次審査を進める議論の中で、ネガティブな態度やシニカルな態度の提案は避け、ポジティブな態度をとる案で、応募者の応答をしっかりと聞いてみたいと思わせる案が二次審査に進むこととなった。

結果的に二次審査では、審査員の読み込みによる一次審査の票数そのものよりも、リモートによるプレゼンテーションで、シートに表現されている世界観を、どれだけより大きく見せてくれるかどうかによって評価軸が定められた。

個々の審査評は、それぞれの審査員により詳細に記されるのでそちらを参照いただきたいが、特に金賞を受賞した『三年限定「家族」-家の解体と家族の再定義』は、現実における物質的な家の解体と疑似家族のように共同生活をする作者も含めたひと

たちの離散のプロセスをシンクロさせて問いかける秀逸な提案であった。さらには、リモートによる公開審査という不利な条件を逆手に取り、フィクションとノンフィクションが交錯するような「その解体される家」からプレゼンテーションするという、まるで映画を見せられているのではないかというような魅力も加わり高い評価を得た。と同時に、田中功起の「抽象・家族」での「…あの時の共同体は今でもわたしに力を与える…いつまでたっても家族だと思う」という言葉も再度思い起こすこととなった。

また、奨励賞を受賞した『線のない渦〜個性から始まる「家族」と「街」〜』は、唯一の高校生の応募という点もさることながら、そのシートの図面もテキストもほぼすべて手描きで表現されていて、PCのアプリケーションのコマンドに頼ったプレゼンテーションが多く並ぶ中で、ひときわ印象的なシートであったことも記しておきたい。

コンペが無事終わり、この審査総評を書いている2021年12月23日、同性婚を認めないのは違憲であるという原告の訴えの2審が札幌高等裁判所で始まった。

この国が「血のつながらない家族」に対してどのような対応をしていくのか、われわれはそれにどのような空間を用意すればいいのか。

正解のない問いはこの先もまだまだ続いていく。

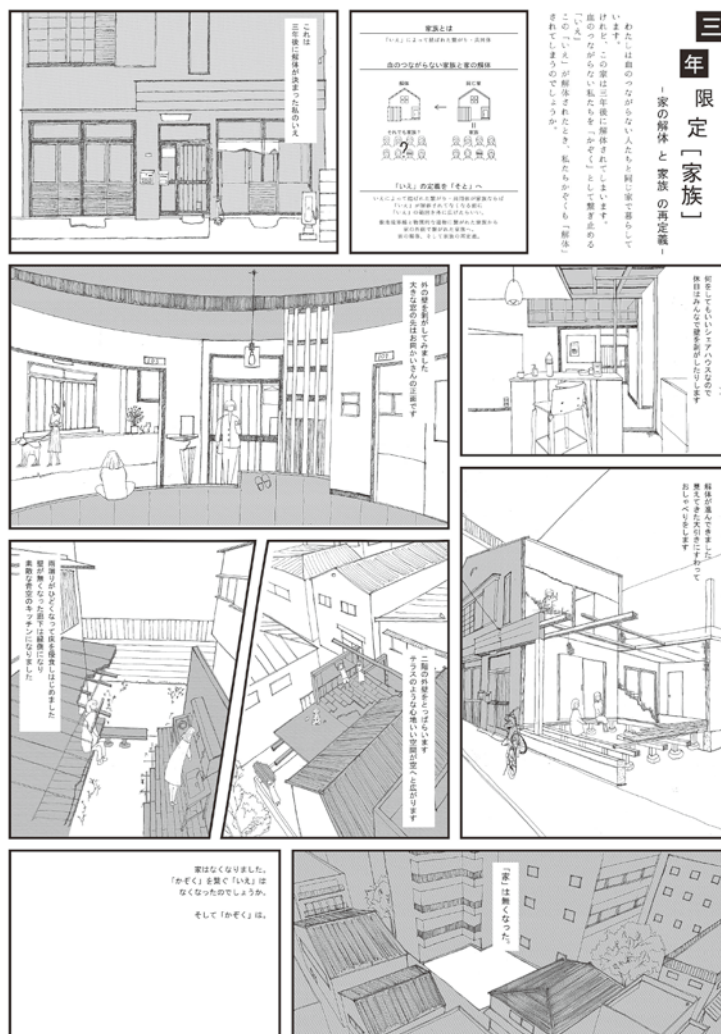
武藤 隆

大同大学 / 武藤隆建築研究所



⇒ 金賞 ⇐ Gold prize

「三年限定「家族」-家の解体と家族の再定義-」 井川美星、力安一樹
(早稲田大学大学院M1/フリー)



金賞となった「三年限定「家族」-家の解体と家族の再定義-」は、書類のみでおこなう1次審査と比べ、口頭で作家自身がプレゼンテーションを行う2次審査で大きく評をのびた作品のひとつである。その原因は様々な考えられるが、大まかにまとめると、以下の3点ではないかと思う。

まず、血のつながらない家族が3年かけて家を解体していく、というこの提案が、概ねノンフィクションである、ということ。審査員一同、1次審査の際には気がつく由もなく、2次審査の場で、大変驚いた。作家の実感に裏づけられた「血のつながらない家族にとって、家が家族をつなぎとめていた。では家の解体が決まった時に、私たちの関係はどうになってしまうのだろう?」という切実な問いは、今回

の設計競技のテーマである「血のつながらない家族の家」というテーマに、これ以上ない投げかけをしたのではないだろうか。

次に、家という物質の解体を通じて、家を、モノを超えた別の存在に再定義しようとしたことが評価に値したように感じる。作家は、解体という行為を通じて、家の細分化を、風景(記憶)の断片化と捉えた。合わせて、解体というその瞬間の出来事と解体される前の出来事を抱き合わせながら、それを、唯一無二の時間として評価した。家がモノとしてなくなった時、家の価値は時間だったのでないか、と訴える。解体=モノが終わっていく時間のデザインであるという事実以上に、家とはそもそも時間である、という批評が大変印象深かった。

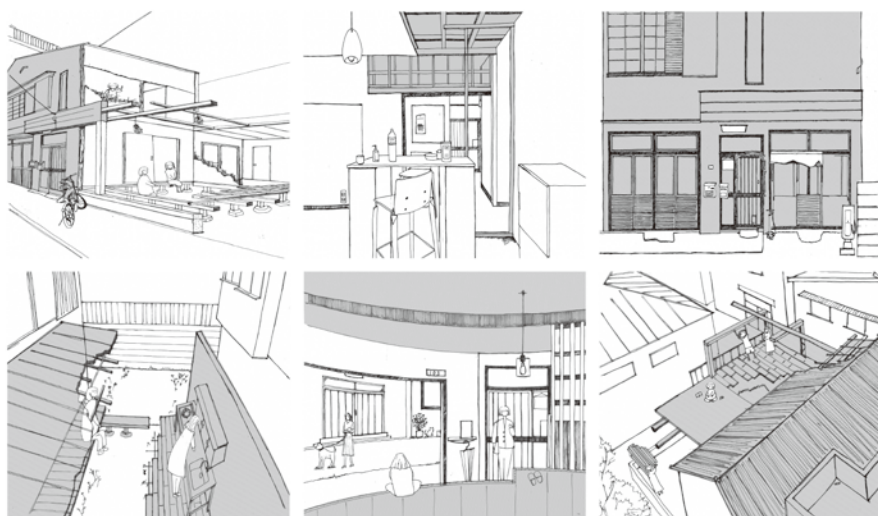
さらに加えるなら、時間という、目に見えない対象を、漫画のような手法によって、押し付けがましくなく、等身大な形で、読み手に届けることに成功した点も大きいと思う。

このように、①痛烈な「家」及び「家族」の批評であること、②家をモノというだけでなく時間としても捉えたこと、③時間としての家をプレゼンテーションで伝え切ったこと、が金賞を射止めた要因である。おめでとうございます。



井川 エリカ
中川エリカ建築設計事務所

「血のつながらない家族の家」金賞受賞者の声



●3年限定家族

多様な暮らしや家族像が認められる現代、私自身も血縁関係のない人たちと同じ家で生活しています。木造住宅が多く残る狭い路地に佇む、古い木造の一軒家です。かぞくという言葉は「家の族」と表記するように、血縁が変わって「家」によって結ばれたこの関係も1つの「かぞく」の形と言えるでしょう。しかしこの家は3年後に取り壊され、この土地には新しいマンションが建設されます。私たちは「3年限定家族」なのです。

●家の解体と家族

従来のような「血縁」で結ばれた共同体は、その関係性が家の解体に左右されることはありません。引越しや所有者の死を境に家が解体されても、別の家で生活をするようになって、その関係は家族です。一方、血縁以外で成立しているかぞくにとっても、その関係性が家の解体に左右されないと考えるのでしょうか。「家」によって家族として成立している私は、家の解体とともにこの関係も解散してしまうのではないかと考えました。

多様な「かぞく」が「かぞく」として居続けられるためには、家そのものの終わり方を再考する必要があります。これは私の家を対象に、血縁以外で結ばれた「かぞく」という関係性を家の解体によって終わらせないため、3年間にわたる継続的な操作によって、かぞくとそのいえについて考え直す提案です。

●「どうせなくなる」文化

3年後には「どうせなくなる」ため、共に暮らす管理人は家具、水回り、共有設備など新しい設備投資に消極的です。一方で「どうせなくなるから」と、家の破壊や改造にはすくなく寛容でした。そのため私たち住民は無意識のうちに、何を減らせば暮らしやすくなるかを考え家の破壊を行ってきました。現状の破壊は主に家の内側で、具体的には玄関とダイニングを仕切る間仕切り壁を取っ払ったり、壁を剥がして構造体を剥き出しにしたりしています。ここでは取り壊されるからこそ生まれた、この「どうせなくなる」文化をこの家の魅力として捉え、意識的に進めています。

●「いえ」と「かぞく」

庭に面した閉鎖的な廊下の外壁を取り払い、ひとりでポーツとできる小さな縁側に。人のいなくなった部屋の外壁を解体し、みんなで集まれる大きなテラスに。雨漏りするキッチンの穴を塞ぐことを諦め、開放的なオープンキッチンに。

解体は、庭など敷地の中にある小さな外部空間に生活を開いていくところから始まり、取り壊しが近づく頃には敷地関係なく外へと広がっていきます。初めは人為的に行っていく「解体」という行為に、年月と共に「自然」による侵食も加わるでしょう。このような解体と生活が共存した暮らしを3年間かけてゆっくり続けることで、この家の日常の中で生まれた思

いや記憶は、それに付随する建築部材の「解体」と、そこでの暮らしの変化へと昇華していきます。「家」は、敷地境界に囲われた1つの建物から、そとの風景、家から見える景色など、建物以外のモノやコトへと拡張し、それによって結ばれている家族という関係自体も緩やかに変化していきます。

●最後に

この設計競技は、住宅を提案するものですが、自身が「血のつながらない家族の家」で暮らしているという背景から、住宅が作られる時よりも解体される時に、家と血縁の関係に対する潜在的な問題があると考えました。

この設計競技に取り組む前は、3年後に自分たちの家が取り壊されるということをネガティブに捉えていました。しかしこの家での出来事を振り返りながら家中を歩き回り、設計を進めていく中で「取り壊し」という出来事を、今の暮らしそのものをよくする、そして家族や家の定義を変えるきっかけとして、捉え直すことができるようになりました。

審査会では、この提案によって私たちの関係性がどう変わるのか、それは家族の定義をどう変えたのか、はっきりと回答することができませんでした。その回答はこの先、この家での暮らし方にあると考えています。建築を学ぶ者としての立場と、一住民としての立場を往復しながら探っていきます。

この作品を通して、家や家族について審査員の方々と議論することができ、大変貴重な経験となりました。審査員の方々、関係者の皆様にこの場を借りて感謝申し上げます。



井川美星、力安一樹

(早稲田大学大学院M1 / フリー)

⇒ 銀賞 ⇐ Silver prize

「伽藍堂のイエ」 小林奈央(京都府立大学大学院M1)



「血のつながらない家族の家」というテーマによる応募者への問いかけを設定した時、さまざまな住まいのあり方を想定していたが、他人同士が住む、いわゆる「シェアハウス」も

その応募のひとつとしてあり得るものだと考えていた。応募作品の中には、やはりさまざまなタイプの「シェアハウス」による提案が含まれていたが、この作品『伽藍堂のイエ』は、それらの中でも群を抜いており、ひときわ目に留まる作品だった。

直方体の大きなボリュームの中に「イエ」型のヴォイドをくりぬくことで、住宅というアイコンをそのボリュームの中におき、アイロニカルに図と地を反転させることで、「ハウス」は伽藍堂となり、型としての「イエ」になるという提案。

「イエ」型によってくりぬかれた周囲に住むひとたちは、その伽藍堂としての「イエ」にすることで、「イエ」が「マチ」にも見立てられるというもの。その小さくプライベートな占有空間から、「イエ」型のヴォイドの伽藍堂の空間を共有するという提案は、住宅や家族のありかたや関係性を再考させる上でも、一つの評価

すべき応募であると思えた。

シンプルな操作によるその空間のつくり方とプレゼンテーションの効果的な見せ方により、一次審査の段階では6名の審査員のうち4名分の票を集め、最多票を得た2作品のうちの一つでもあったが、リモートによる2次の公開審査では、審査員が想像していた応募にとどまってしまうことから、惜しくも金賞を逃した。

とはいえ、評価軸の定められた今回のテーマにとどまらず、「シェアハウス」のプロトタイプとしての可能性も十分に感じられる力作であったことを付記しておきたい。

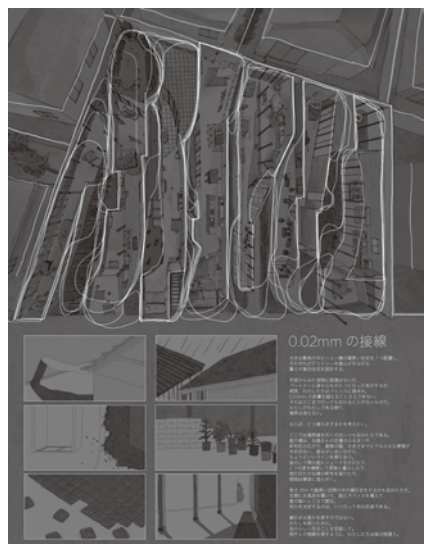
武藤 隆

大同大学 / 武藤隆建築研究所



⇒ 銀賞 ⇐ Silver prize

「0.02mmの接線」 三枝理子(九州大学大学院M2)



今回のテーマ「血のつながらない家族の家」はとても難しい。一般的に家族の中心は、男女の夫婦だが、実際にはこの二人には血のつながりはない。一方で、血縁関係というように、血のつながりこそが家族の象徴であるという思想も根強い。

「家族」とは何かについて、「家」をもって、解決せよ。難題である。

作者は、人と人が物理的に越えられない象徴として、皮膚の厚み0.02mmに例え、その接線を家と家の境界として表現している。具体的には、細長い住宅7棟を接するかのようになり添って並べ、その接線をどう解釈し、どう線引きするかを居住者に委ねる選択肢を与えた。建築計画的に細長い空間は、移動も増え、空間的な開放感なども得難いが、細長いことで、お隣さんとの関係にその都度、線を引くことを可能にしている。例えば、お隣さんがパーティをしていたら反対側へ移動して過さず、お隣さんが手入れした中庭の花壇を眺めながらコーヒーを飲むなどなど。この気遣いや共有といったことが線引きであり、家族たる行為にもなるということか。

実は、現時点でもこの提案の核心は掴みきれていない。ディスカッションでも、審査員の

興味(質問)と作者の興味(回答)がちぐはぐすることがあったが、このお互いを理解するためのやり取りが、実は作者が言う線引きであり、それを実感したことによって、審査員の推しの評価があったのかもしれないも思っている。最終的には、シート表現の世界観、詩的なテキスト、興味をそそるタイトル、それを語る作者、それぞれの魅力が重なり合って、銀賞へ導いた。作者が今後もどんな提案をしていくのか楽しみです。

槁本 雅好

椋山女子学園大学



銅賞 Bronze prize

「「間」係性—間から生まれるつながり—」中井由季(大同大学工学部4年)



個人的な思いとしては、この難しいコンペのテーマについて、建築としての解答も然ることながら、応募案の家族設定がどのようなものであるか、つまりわたしたちの「家族像」への想像力の射程を見てみたかった。例年になく応募者が多かった中で、それ以上に驚きだったのが、結果として二次審査に残ったグループのほとんどが女性だけ若しくは女性を

中心とするグループだったことで、その理由について憶測するところとしては、やはり社会的に不利な立場におかれやすい女性たちが、家族制度やその空間、あるいはコミュニティの在り方についての想像力を開いているのかも知れない。とはいえ一方では、その射程は、むしろメディアを賑わす話題の方に引っ張られてしまっている嫌いもあり、LGBTQを扱った作品がどうしても目についてしまった。その中で本作は、作者自身の経験、亡き祖母の死をその隣人の死と比較しながら、人の一生と、迎えつつある多死社会、あるいは現在進行中の空き家問題にも、わたしたちの想像力を誘って

く案だった。実体験に基づく動機付けには説得力があるのだが、隣人設定が気掛かりで、実際にはまるで相容れない感受性の隣人というのがあり得るわけで、筋書き通りにことが運ぶのかどうか。

発表を見ながら『ル・コルビュジエの家』という、“あり得ない”隣人に悩まされるというコミカルでホラーな映画を思い出していたのだが、隣人問題の経験者としては身につまされるところでもあり、かつてのような「町内のまとめ役」みたいな人物も期待できないまま、すれ違いを抱えたまま、様々な分断が進んでいくわたしたちの社会の行く末に思いを馳せてしまった。作者の前向きな心持ちは救いだ。

道家 洋
道家洋建築設計事務所/JIA



道家 洋

道家洋建築設計事務所/JIA

銅賞 Bronze prize

「家事族 家事を共にして生きる家族のかたち」村上琴美(横浜国立大学Y-GSA M2)



私は当初この作品にはさほど魅力を感じなかったのだが、「かつての職人たちの、親方とその徒弟たちが住む家族的なイメージがある」といった主旨の指摘がある審査員からあり、なるほど言われてみれば、家父長的で垂直的な家族を都市の密集地帯に開放することで、水平的な広がりとおおらかさを獲得しているように思えてくる。自営的職種を内包させ

るなど、自律を期待させる目配りもあり、共同体でシェアされるあちこちの家事の場が、それぞれかつては「女性的」振舞いの代名詞でもあった「井戸端会議」的な分散的コミュニティが生まれてきそうな予感もさせてくれる。

そんな郷愁にも似た感情の惹起を味わっている

と、別の審査員から「(本作に提案されているような共同性は)社会主義下のソ連の共同住宅などに失敗事例をもつ」といったやや否定的な見解も出た。思い出されるのが、少し前に観たロシア映画、『動くな、死ね、蘇れ!』で、そういえば、そんな共同住宅の台所が描かれていた。そうかアレか。とどのつまり共産主義においては家族は止揚され解体されるのだ。

他方資本主義の側では、住宅、わけでも台所をその労働力再生産の場所として、核家族とともに商品経済に組み込み、合理的で無駄のない家事動線と衛生的な設えによる「システムキッチン」なるものを発展させ(家庭の工場化)、「最新の」家電類とともに、家事労働を軽減し、女性の社会進出(家事の産業化)をも促してきた。台所はイデオロギーなのだ。

本作では家(事)を「生きるエネルギーを生み出す労働の場」と捉える。むしろ古典的なその認識には、にもかかわらず、男女の区別が既がない——そのような家事労働の解放、共有という、古くて新しい「コミュニズム」には「画餅」として捨ててたい引力がある。



道家 洋

道家洋建築設計事務所/JIA

⇒ 銅賞 ◀ Bronze prize

「明るいトンネルの先に」 大久保芽依、亀山友花、中村茉友果、三輪華菜子
 (名古屋工業大学工学部3年・1年、名古屋造形大学地域社会圏領域2年)



学生に対して、重くなりがちなLGBTの諸問題を考えさせるのは、どうにも荷が勝ちすぎる。提示された課題文を読んでみて、のうのと学生時代を送っていた自分は応募を見合せ

ただろうな、と思った。実際に上位に入った作品たちを見渡してみると、「血」あるいは「家族」を故意にミスリードし、課題文に示された論点をずらしながら入賞を勝ち取ったいわば「クレバーな」案が多かった。もちろん、それらの作品に拍手を贈るのはやぶさかでないが、課題文にキチンと向き合った案も選びたい。そんな審査員の思惑が交差したのが本作品の入賞であるように思う。

このレズビアン・カップルのための住宅へは、トンネル状の玄関をくぐるように入る。トンネルの先は大きなダイニングと土間をもつ吹抜けが設えられている。ここは、地域／セクシャルマイノリティの交流スペースとしても使われ、全体の半分近くの気積が与えられており、上からは波のようにうねる屋根のスリットを通して光が差し込む(この「光」は是非表現して欲しかった!)。案の最後には今後100年にわたる、この住宅のタイムテーブルが付き

れている。二人の没後、この住宅はブックカフェとして生きづらさを感じている人々の心の拠り所となるという。このように同性カップルにとって、財産を受け継ぐ者の不在が一つの課題となる点にも目を配っている。

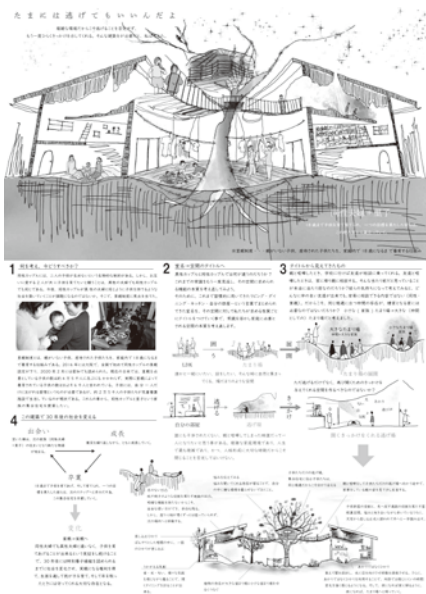
建築設計の実務は、細かな「決定」の連続になりがちだ。この案にもツツコミたいところは多く見受けられるが、それは裏を返せば小手先のテクニックで誤魔化せずに「決定」し続けているからともいえる。その心意気に贈られた銅賞と思っていほしい。

東福 大輔
 零三工作室/JIA



⇒ 銅賞 ◀ Bronze prize

「たまには逃げてもいいんだよ」 梶田龍生、安井友輝、田中千裕、高橋萌
 (名古屋工業大学工学部3年・2年)



普段美術作品に向き合う学芸員という立場からしても、今回の「血のつながらない家族の家」というテーマは、コンセプトが際立つ美術作品にも通じる、興味深いものであった。

テーマに呼応して提案されたプランは、それぞれに着眼点が異なりよく考え抜かれた、実に多様なものであった。

このプランでは、特に建築自体が持つ機能に加えて、それが周囲の環境、さらに社会に対して及ぼすであろう肯定的な側面に注目した。

樹が屋根の中央から突出した住居は、内側のプライバシーを保護しつつも、そこに住む人々の間に有機的な関係性が生まれることを、住人にも周囲にも想像させる。そして中央の木を軸にして、それを囲むように構成された建物の内部は、住むという機能だけでなく、子どもが育っていくための遊び場や子どもたちだけの空間も用意している。木の上の小屋は秘密基地や隠れ家のような高揚感を抱かせるだろうし、そこに繋がる吊り橋のような通路は冒険心を掻き立てるはずである。吊り橋や凹凸がある大地のような基底部を歩き来す

るうち、人々は住宅街に暮らしながらも半ば自然のなかにいるような身体感覚を味わうだろう。視覚的にも空間的にもある程度開きつつ閉ざされた場合は、予測できないことがおきる人間が育っていくのにふさわしい有機的な場を準備する。

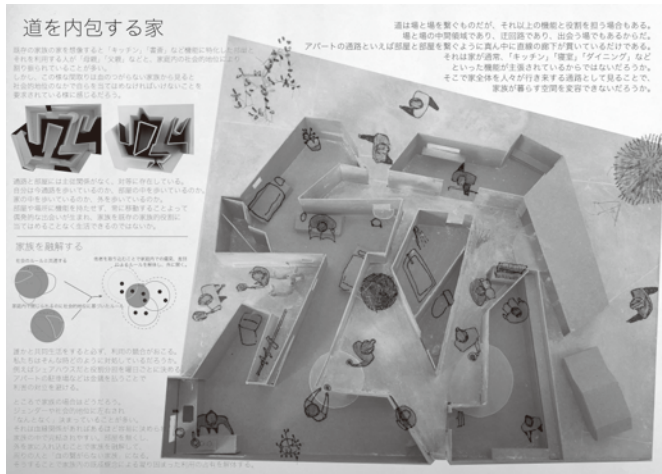
建築が未来に向けた、血縁に縛られることのない新しい家族像を描くには、まるで絵本に現れる夢のような空想的な要素も、時には必要だろう。家族の構成員が減少していく一方の現代、その流れに相反するように。

能勢 陽子
 豊田市美術館学芸員



➤ 中川エリカ ゲスト審査員特別賞 ◀ Special prize

「道を内包する家」 諸江一桜 (秋田公立美術大学2年)



ゲスト審査員特別賞となった「道を内包する家」は、いびつな形をした各部屋（エリア）が分棟形式で集合し、その間に、いびつな形の路地のような通路（間）があることによって、ギリギリ一棟の家と呼べるような全体性を獲得している。一見、合理性とはかけ離れたように見えるこのいびつさが、家をグッと面白くして

功している。快適な場がたくさんあれば、どこで寝ても良いし、どこでごはんを食べても良いような、気楽さが生まれる。そのことが、居場所の選択性に繋がり、時間と共に居場所がうつろうような自由さを得ている。この家に住むのは、さぞかし柔軟で、開放的な人間なんだろうな、と思わせる。血がつながっているか

いるように思えて、一次審査の際から票を入れた。

面積算定や通り芯からは決して生み出すことができないであろう、このいびつさにより、家は、部屋とは呼べない快適なコーナーを無数に、内外を横断しながら、獲得することに成

どうかなんて些細な問題だ、とさえ感じられるかもしれない。そういう家は、昨今少ない。けれど、元来、家とは、そういう大きさがあった。家を通じて、自分ならどんな住み方ができるかを想像させる家。人間を問うような家。それこそがこの提案の魅力なのだと思う。



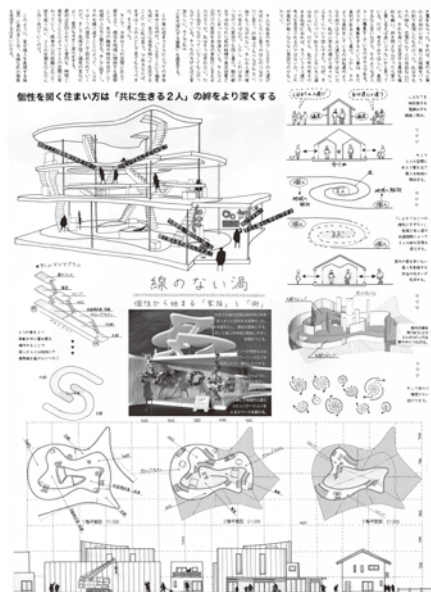
中川 エリカ
中川エリカ建築設計事務所

➤ 奨励賞 ◀

Incentive prize

「線のない渦 ～個性から始まる「家族」と「街」～」

林那海 (三重県立四日市工業高等学校3年)



「審査を終えて」

第37回JIA東海支部設計競技の審査員をつとめさせていただいた。37年も続いているということ、大学生・大学院生だけでなく、高校生からも毎年応募があるという幅広い注目度を集める存在となっていることに、大変驚くと同時に、関係する皆さんの継続に対する多大なる尽力を感じた。まずはこの場を借りて敬意を表したい。

卒業設計のような異種格闘技戦の審査とは異なり、テーマのある設計競技の審査は、共通の問題・問いを、様々な角度から深掘りするおもしろさがある。言い換えればそれは、応募者も審査員も、この設計競技の間だけは同じ研究室に所属して、事物を探求するようなおもしろさである。

JIAの設計競技では、テーマは変わるものの、ここ数年は共通して「家」を扱っている。テーマの変遷を見ると、時代を反映してい

て、それだけで興味深いのだが、特に今回の「血のつながらない家族の家」というテーマは、LGBTQやコロナ以降の人間同士のつながりなど、例年以上に、これから人間が生きていく上で考えなければならない根源的なフックがてんこ盛りとなっており、取り組みやすい一方で、とても難しいテーマだったと思う。

応募作品の提案内容は、多岐に渡っていたが、私が票を投じた作品はどれも、家が本来持つべき「大きさ」を感じさせるものだった。ここで言う大きさは、面積の広さではなく、街にその家がある事による懐の深さ、みたいなものだ。前近代には当たり前であった大きさが、今、失われていること。しかし、現代人が知ってしまった便利さを投げうち、単にタイムスリップして前近代に戻るわけにはいかないこと。では、現代において、どんな大きさが本当に必要なのか？どうすれば獲

得できるのか？その大きさと共に、人間はどう生きるのか？

その探求に関わることができる審査の時間はとても楽しいものでした。ありがとうございました。



中川 エリカ

中川エリカ建築設計事務所

「中川エリカ氏 記念講演会」

設計競技の審査に続いて、中川さんに『身体的に考える』というテーマでレクチャーをしていただきました。

頭(理論的)ではなく、発見的に設計する。言葉ではなく、「言葉にならない何か」を大事に設計する。そしてそのためには、ひとこと言えば「立体的に考える」、すなわち「模型で考える」ことである。というお話でした。

考えてみれば、建築は基本的に図面で考えます。もちろん模型やCGを使って立体的な検討も行いますが、BIMですら基本になるのは平面図と高さ寸法で、二次元情報が優位であると言えます。ところが中川さんのアプローチはその主従関係が逆転しており、まず立体(模型)があり、それを図面に落とし込む、というプロセスが徹底されています。

その「模型」も尋常ではなく、検討の開始時点で1/20や1/30という詳細スケールで、

それも緻密に作り込む徹底ぶり。なぜそこまで・・・？二次元出発のアプローチでは中々理解が追い付かないかもしれません。

どうもお話を伺っていると、中川さんにとって詳細な模型を作ることは、ぼーっと眺めているだけでは見落としてしまいそうな風景のディテールを掘り上げる、細密デッサンのような行為であると言えそうです。

石畳や路地を走るオートバイ、破れたフェンスなど、一見どうでも良さそうな細部こそがその土地の空気感をつくり、それらを気に入ったからこそ、クライアントはその土地を選んだのではないか。だから、その土地をやれる限りの高解像度で抽象化することなく捉え、そこで見つけた土地の魅力や雰囲気を活かす建築を作りたい・・・という中川さんの言葉には説得力があり、確かにそれには緻密な模型は最適。きっと作っているうちに、はじめは

気づかなかった様々なイレギュラーが次々と見つかるんだろうな、と想像させられました。そしてこのアプローチはまた、建築を開く事への共感を得るための、優れた手法でもあるように感じました。



水谷 夏樹

水谷夏樹建築設計事務所

内藤廣 講演会 「これからの地域の建築家の役割」～5つの質問に答える～

●日時:2021年12月9日(木)15:00~17:00

●形式:オンライン講演会/オンライン参加 130名/会場参加(静岡市産学交流センター・ペガサート)30名

今回のオンライン講演会は内藤先生より主催者に5つの質問が依頼され、その質問に答える形で「これからの地域の建築家の役割」についてご講演いただく内容で開催されました。

質問1 災害と市民、行政と建築家の事前復興の役割

東日本大震災より10年間を通して感じ考えられたこと、東北地域の建築家の実情と役割について、また静岡県における事前復興の準備と建築家の役割は何でしょうか。

回答1 10年経ちますが、とても及第点をあげられるような復興ではなかったと思います。三陸の復興に関しては、極めて官僚的な復興をしたと思います。ですから問題の解き方が固い。また復興について、仕組み上、建築家はほとんど排除されました。

静岡についてもこれから南海地震、駿河湾地震等切迫しています。今のうちに皆さんも色々学んで、東北での復興の状況を理解すると、何をしたら良いかが分かると思います。

静岡は良いモデルが作れるのではないかと思います。静岡は防災意識が高く、「防災」をキーワードにコミュニティーのまとまりを作る・まちづくりの基本的な考え方を作る・建築はどうあるべきか・復興するときはどうしたら良いかなど組み直したら良いのではないかと思います。また、三陸の例をみると消防団を地域コミュニティーの要とする案も良いと思います。

また建築家は圧倒的に勉強不足だと思います。区画整理法を読んだことがあるでしょうか?河川他土木の勉強もしなければいけません。公と私をどうやってうまく調和させるのか?が大切なことです。

質問2 コロナ禍と地域の今後の可能性

コロナ禍により生活は大きく変わりました。人同士が接する機会をなるべく少なくすることが求められ、東京一極集中を避けるため地方への移住が勧められています。この状況下、地域の建築家はどのようなことが求められるのでしょうか。

回答2 建築家の役割は、人と人をつなげる場をどのぐらい作れるか?今までは量の話だったが、今後は質の問題だと思う。東京と同じことではなく、地方で居心地の良い場所を作る。コロナを契機に皆、考え出してきています。また女性と子育てそして教育ということが大切です。地域に活躍できる場所が必要だと思います。



質問3 建築家の存在意義・これからの建築家の職能

大きなプロジェクトはPFIやデザインビルドといった形態になりつつあります。建築家の存在意義をどこに求めれば良いのか?これからの建築家の職能について意見を聞かせて下さい。

回答3 最近の建築家の役割はプロジェクトの味付けでしかない。新国立競技場の設計の白紙撤回は、転機になっています。世の中は建築家に依頼をすると「面倒くさいことが起こる。」発注側はPFI、デザインビルドにしようとなる。正にこれは建築家の地位の低下、質の問題であり、それで良しとした建築家の問題であると思います。

質問4 近代建築の維持・保存

日頃の生活において「歴史の感覚」のようなものが希薄になっているように感じます。近代建築の保存・活用についてどのようにお考えでしょうか。

回答4 誰の心にもある歴史の保存についてその良心に訴える事が必要と思ってきましたが、現在、地方自治体も生き残りをかけなければいけない経済状況の中で、本当にそうなのかと疑問に思っています。文化的な良心のみで考えるのではなく、一般の人が「それを利用した方が得だと思うか」という合理的な考え方の方が建物を残すことが出来るのではないかと。残す価値があるかではなく、利を生む形で保存する事が重要だと思います。

質問5 都市計画と建築家の関わり方

以前から都市計画は都市プランナーにより計画され、建築家が関わる事が出来ません、建築家は都市計画に関わる上で、どのような発信が必要でしょうか。

回答5 前にも述べましたが、建築家はもっと都市計画を勉強すべきだと思います。官と民の両方の気持ちに分かるのが建築家だと思っていますので、建築家に出来る仕事は多くあると考えています。

その後、質疑応答が進行しました。数多くのオンライン参加者を迎え、建築家としての問題意識の持ち様、やるべきこと等について手がかりを得られたように思いました、とても有意義な時間をすごせたのではないかと考えています。

最後に内藤先生が冒頭に述べられた「建築家について」を記載いたします。

「建築家は 志を高く持つこと・その志を実現するために、もっとずるくなること・もっと賢くなること・もっと戦略的になることが必要ではと思っています。」



大瀧 正也 (JIA静岡)
(有)聖建築設計事務所

丹生大師周辺を建築ウォッチング

松阪の南の多気郡多気町丹生は、集落の外側に田園が広がる何処か懐かしい農村風景の盆地に位置しています。近くを中央構造線が走り、地名の丹生(にう)の丹は水銀を示す地名で、縄文時代から昭和初期まで続いた水銀鉱採掘跡も残されています。奈良の大仏建立時には、かなりの丹生水銀が使われたとの事。

村の中心に位置する、丹生大師(にうだいし)の正式名称は「女人高野丹生山神宮寺成就院」。縁起によると、空海の剃髪の師匠、勤操(ごんそう)大徳によって開山、弘仁4年(813)、伊勢神宮参拝途中の空海によって、七堂伽藍が整備された。中世には、丹生千軒と呼ばれ、全国から、商人や鉱夫が集い、和歌山別街道の宿場町として、繁栄の時代を築いた。現在残る伽藍の多くは、江戸時代前から中期に建造されたとあります。第二次世界大戦中の鉄不足で、鐘樓の寄付を迫られる寺院が多い中、ごく僅か、位の高い寺院は残すことを許された内の一つ、歴史のある音色を奏でる鐘樓は、何時でも自由に鳴らす事が可能で、煩惱が少し消えたような体験ができます。

丹生の歴史を語るうえで、欠かせないスーパーヒーローが、西村彦左衛門為秋氏(以後敬称略)です。江戸時代に入ると、水銀の採掘が衰退し、出稼ぎに出る村人も多くなります。文化5(1808)から文政6(1823)にかけ、西村彦左衛門は、私財を投じて、櫛田川から全長30キロに及ぶ、水田開発のための「立梅用水」(たちばいようすい)を見事なリーダーシップのもとに完成(延247,000人)させました。和歌山別街道沿いの、造酒屋の生家跡は

今も残り、その偉業を讃えて、西村彦左衛門記念公園として整備され、銅像(2005)も建てられています。現在も436 haの受益面積を誇る現役の農業用水は、「世界灌漑施設遺産」に登録されています。全長わずか6mの高低差で流れ、機械的な土木技術が全く無かった時代に、素掘りのトンネルや、切り立った岩山を通る切通しは圧巻の景観です。6月のあじさいまつりには、素掘りトンネル区間で、ポータ下りの体験ができるとの事です。西村彦左衛門の7代子孫にあたる西村彦蔵氏は、2017年の豪雨で全壊した、丹生大師の大師堂(御影堂)に至る回廊、老朽化した仁王門の再建の為に、私財を投じ2019年10月に見事に再建落成されました。新しく記念公園内にはその功績を讃えて、西村彦蔵氏の銅像も建てられています。

和歌山別街道沿いには、三井家の三井高利の母親の殊法(しゅほう)の生家の商家永井家跡地も、小さな集会所の敷地内に石碑が建てられ脚光を浴びつつあります。また、人口減少等、空き家となって放置された古民家は、惜しくも解体されてしまうのがこの地域の現状です。旧丹生小学校の隣の本楽寺の大イチョウと、手入れが行き届かなくなりつつある茶室付きの回遊式日本庭園(快楽園:けらくえん)。他にも伝えたい歴史的建造物候補満載で、ポテンシャルの高さを感じました。

東の間のコロナ禍の制限を縫うように、目的地を絞り込み11月20日(土)、三重地域会10名の参加で開催することができました。当日は、天候にも恵まれ、集合場所の、ふれあいの

館にて、一同昼食をとることもできました。候補地選定の際、2013年発行「三重の建築散歩」にも掲載は無く、アーキテクト三重2012のジャケ写(表紙の写真)のポイント(丹生山神宮寺回廊)の所在地として、突き動かすものを感じました。開催にあたり、三重地域会の皆様には、ご理解ご協力を頂き、また、事前の打合せから、当日の案内役として多気町観光ボランティアガイド「語り部の会」会長の松本様と顧問の中西様には大変お世話になりました。この場をお借りし、お礼申し上げます。奇しくも2年連続で、古刹めぐり(特に趣味では無いが)のような建築ウォッチングとなりました。心の中の奥底に、歴史的パンドミック収束を願って祈りたい気持ちが芽生えているのかもしれない。次年度は是非、県外へ出てモダンズムツアーを開催できるよう祈りたいと思います。



伊藤 達也 (JIA三重)
設計工房NEXT



▲丹生大師仁王門



▲縦梅用水切通し



▲参加メンバー集合写真

▼本楽寺



2022年度 東海支部役員選挙についての報告

2021年 11月15日
東海支部選挙管理委員会委員長 矢田 義典

2022年度東海支部役員選挙について、11月10日に立候補を締め切り、11月15日に第2回選挙管理委員会を開催しました。立候補者は支部役員選出規約に定める定数と同数であり、立候補届出書の記載も適正かつ被選挙人の資格を有することが確認されましたので、立候補者を当選人として確認しました。ここにご報告申し上げます。

当選人は下記の通りです。

【幹事】

●静岡地域会

石橋 剛 ((有)石橋修建築設計室) ○

大橋康孝 ((株)高橋茂弥建築設計事務所)

●愛知地域会

近藤万記子 (ホームデコール設計事務所(同))

関口啓介 (人建築事務所) ○

高木耕一 ((株)東畑建築事務所)

野々川光昭 ((株)オウ環境設計事務所)

森 哲哉 (森建築設計室) ○

●岐阜地域会

内田実成 (内田建築設計事務所) ○

山田浩史 (ヒロプランニング)

●三重地域会

出口基樹 (日新設計株式会社) ○

森本雅史 ((株)森本建築事務所) ○

【監査】

鳥居久保 (企業組合 針谷建築事務所) ○

石田 壽 ((株)中建設) ○

注：敬称略、○印は再任

2022年度 東海支部愛知地域会役員選挙についての報告

2021年 11月15日
愛知地域会選挙管理委員会委員長 藤巻 志伸

2022年度東海支部愛知地域会役員選挙について、11月10日に立候補を締め切り、11月15日に第2回選挙管理委員会を開催しました。立候補者は地域会長・副地域会長候補(支部幹事兼任)5名と、地域会監査2名の定数と同数であり、推薦立候補届出書の記載も適正かつ被選挙人の資格を有することが確認されましたので、立候補者を当選人として確認しました。ここにご報告申し上げます。

当選人は下記の通りです。

【地域会長・副地域会長候補】(支部幹事兼任)

近藤万記子 (ホームデコール 設計事務所(同))

関口啓介 (人建築事務所) ○

高木耕一 ((株)東畑建築事務所 名古屋オフィス)

野々川光昭 ((株)オウ環境設計事務所)

森 哲哉 (森建築設計室) ○

【地域会監査】

鈴木利明 (一級建築士事務所 デザイン スズキ) ○

水野豊秋 ((株)ヤスウラ 設計)

注：敬称略、○印は再任

扶桑町の東南にあるこの寺は、1330年(元徳2年)の創建時には天台宗の小本寺であったが、文明年間(1469年～1487年)の火災で一切を焼失、14世友峯和尚が1510年(永正7年)に再建して臨濟宗に改めたと扶桑町史には記されている。

境内には本堂の他、大日堂、庫裏、山門、鐘楼、書院、茶室棟等が配置されており、本堂は正面をほぼ南として建ち、入母屋屋根とする平入りで、東面南側に玄関

棟、北面中央に開山堂、位牌堂が接続されている。外部は差鴨居に横舞良戸嵌め込み、可動式の板戸と格子ガラス戸という設えである。内部は禅宗の方丈形式で前3室、後3室の整形6間取りとなっている。天井は下間、室中、上間の前面3室を続きの格天井とし蟻壁を回し、樺掛けを入れた竹の櫛欄間を設えた広い空間としているが、上奥間の2室構成やツシ2階は独特なものといえる。正面を東にして本堂南西に建つ3間堂の大日堂は、1間の向

拝と背面に仏壇が張り出して設えてあるが、仏壇両脇には1868年(慶応4年)の犬山入鹿池の「入鹿切れ」により罹災した千人近くの人々のための千駄地藏が安置されている。

明治以降の3度の地震を経験したが2005年(平成17年)江戸時代の禅宗様式を残す建物として国登録有形文化財に指定される。



【概要】

- 名称：臨濟宗妙心寺派 覚王寺
- 所在地：愛知県扶桑町大字高雄字南屋敷
- 登録番号：本堂（第23-0200号）
- ：庫裏（第23-0201号）
- ：大日堂（第23-0202号）
- ：鐘楼（第23-0203号）
- ：山門（第23-0204号）



本堂



山門



庫裏



鐘楼



大日堂

編集後記

●表紙のスケッチは思考の過程がかがえます。なんでも瞬時に、遠くの人に、多くの人に発信することを前提に、

発想の始まりから考えてしまっていることが多いように最近ではありますが、まずはじっくり、手の内で、内なるものに向けてカタチを考え始めてみようとして自分に言い聞かせるきっかけになりました。「防火建築体・防災建築街区を巡って」は連載最終回となりました。都市の骨格を形成する要素の一つとして確かに重要な存在になる可能性を認識するようになりました。内藤廣さんの講演会は近代建築の維持・保存への質問に対する回答「残す価値があるかではなく、利を生む形で保存する事」に考えさせられます。東海支部設計競技二次審査はリモートプレゼンとのこと。表情、目線、身振り

手振りが使えない相手にどのように刺さるプレゼンをするのか興味がわきました。(中村 慎吾)

●先月号の『ARCHITECT』400号記念で、ここ数年の編集の変遷をまとめ、ページ数が減少してきたことがわかるグラフを作成しました。コロナ禍で活動報告記事の減少もあったことで、掲載誌面に困ることもあまりなかったのですが、今月号で特集した支部コンペのように事業が復活してきましたので、誌面の都合上掲載を先送りする事業も出てきました。冊子の仕組み上、4頁単位での増頁検討となり、どの号に何を掲載するかに迷うことがあります。事業実施後、できるだけ早く報告記事を掲載したいと思うのですが、様々な事情で遅くなることもあります。編集会議では、数か月先の台割を検討していますが、また新型コロナウイルスのオミクロン株拡大の影響で、予定されていた事業が急遽中止になるなど、先が読めない

状況がまだまだ続きそうです。皆様のご理解、ご協力をお願いします。(川本 直義)

原 眞佐実 (JIA 愛知)
原建築設計事務所



ARCHITECT

第401号

発行日 2022.2.1 (毎月1回発行)

定価 380円(税込み)

発行責任者 水野豊秋

編集責任者 川本直義

編集 東海支部会報委員会
愛知地域会ブリテン委員会
株式会社イツミ内

ARCHITECT 編集部

岡崎市明大寺町荒井10番地

TEL (0564)21-2657 FAX 26-1792

発行所 (公社)日本建築家協会東海支部
名古屋市中区栄 4-3-26 昭和ビル

TEL (052)263-4636 FAX 251-8495

E-Mail: shibu@jia-tokai.org

http://www.jia-tokai.org/

第53回 中部建築賞の入賞・入選・特別賞作品決定

中部9県の建築関係団体で構成する中部建築賞協議会は、「第53回中部建築賞」の受賞作品を発表した。今回は、応募数一般部門A32点、一般部門B28点、住宅部門32点の計92点の応募作品の中から以下の20作品が受賞した。

◆審査員(五十音順、敬称略)

- ・審査員長／大野 秀敏(建築家)・佐藤 義信(建築家)・塩見 寛(都市環境デザイナー)
- ・筒井 裕子(建築家)・藤吉 洋司(建築家)・松本 正博(建築家)
- ・横山 天心(富山大学 芸術文化学部准教授)・吉田 純一(福井工業大学 客員教授)

※表彰作品の概要は次のとおり ①所在地 ②規模 ③建築主 ④設計者 ⑤施工者(敬称略)

一般部門A(入賞)



大同大学 X(クロス)棟

①愛知県名古屋市 ②鉄骨造 地上4階15,391.69㎡ ③学校法人大同学園 ④日建設計一級建築士事務所 ⑤大林組名古屋支店



Involve

①愛知県日進市 ②鉄骨造一部鉄筋コンクリート造 地上2階地下1階 2,460.52㎡ ③キョートー ④bandesign ⑤松井建設名古屋支店



志太広域事務組合畜場会館 星山の苑

①静岡県焼津市 ②鉄筋コンクリート造 一部鉄骨造 地上2階塔屋1階 4,722.35㎡ ③志太広域事務組合 ④山下設計 ⑤橋本・近藤特定建設工事共同企業体



長野県立美術館

①長野県長野市 ②鉄筋コンクリート+プレストレストコンクリート造 一部鉄骨造 地上3階地下1階 13,256.96㎡ ③長野県 ④プランツアソシエイツ、オーブンヴィジョン ⑤清水・新津建設共同企業体

一般部門A(入選)



アネシス茶屋ヶ坂

①愛知県名古屋市 ②木造+鉄筋コンクリート造(ハイブリッド構造) 地上4階地下1階 3,211.42㎡ ③清水建設名古屋支店 ④清水建設名古屋支店 一級建築士事務所 ⑤清水建設名古屋支店



トヨタ紡織 グローバル本社

①愛知県刈谷市 ②鉄骨造 地上7階塔屋1階 28,504.88㎡ ③トヨタ紡織 ④竹中工務店 ⑤竹中工務店



四日市市総合体育館

①三重県四日市市 ②鉄筋コンクリート造一部鉄骨造 地上3階 17,548.08㎡ ③四日市市 ④久米設計 ⑤大成・中村特定建設工事共同企業体



国工芸館

①石川県金沢市 ②鉄筋コンクリート造+木造一部鉄骨造 地上2階地下1階 3,072.22㎡ ③石川県 ④山岸建築設計事務所 ⑤真柄・高田・共栄建設共同企業体、岡・本田建設共同企業体、長坂・川元建設共同企業体

一般部門A(特別賞)



名古屋テレビ塔リニューアル(中部電力MIRAI TOWER)

①愛知県名古屋市 ②鉄骨造一部鉄筋コンクリート造 地上5階地下1階 3,765.31㎡ ③名古屋テレビ塔 ④日建設計一級建築士事務所 ⑤竹中工務店



城下町の客室

①三重県伊賀市 ②木造 地上2階 364.00㎡ ③NOTE伊賀上野 ④ありん ⑤あづま工務店 森本建築特定建設工事共同企業体、ドリームリフォーム



下石の通い所

①岐阜県土岐市 ②木造 地上1階 499.65㎡ ③YUKAIGO ④ほとけ建築事務所、Uo.A ⑤澤崎建設



本町BASE

①岐阜県関市 ②鉄骨造 地上2階 149.12㎡ ③大建met(発注者 関市) ④大建met ⑤田口建設

一般部門B(入賞)

一般部門B(入賞)



「Cuisine régionale L'évo」消滅集落のオーベルジュ

①富山県南砺市 ②木造 地上2階 868.35㎡ ③Dotok ④一級建築士事務所本瀬賢田建築設計事務所 ⑤近藤建設



新富士のホスピス

①静岡県富士市 ②鉄骨造 地上2階 906.27㎡ ③医療法人社団秀峰会川村病院 ④一級建築士事務所山崎健太郎デザインワークショップ ⑤佐藤建設



花水木ノ庭-広場路の長屋-

①富山県富山市 ②木造 地上2階 317.65㎡ ④dot studio一級建築士事務所 ⑤前田建設



miike

①長野県東御市 ②鉄骨造 地上1階 64.83㎡ ③miike ④ihmk一級建築士事務所 ⑤アールクラブ

一般部門B(入選)

一般部門B(特別賞)

住宅部門(入賞)



志摩の小庭 いかだ丸太の家

①三重県志摩市 ②木造(伝統技法) 地上1階 59.62㎡ ③m5_architecte 一級建築士事務所 ④東原建築工房



今伊勢の家

①愛知県一宮市 ②木造 地上2階 140.21㎡ ④川本達也建築設計事務所 ⑤澤崎建設



大泉寺の家

①愛知県春日井市 ②木造 地上2階 176.96㎡ ④みわ建築設計工房 ⑤カワイ建築



支えの家

①愛知県知多郡 ②鉄筋コンクリート造一部木造 地上2階 234.24㎡ ④金沢工業大学 ⑤前田工務店

住宅部門(入選)